
昇る～ 宇宙エレベータの夢の話

乙未七菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昇る〜 宇宙エレベータの夢の話

【Nコード】

N7634V

【作者名】

乙未七菜

【あらすじ】

生きてるものと死んでるものについてのはなし。

昇る昇る。

景色が急浮上する。

わたしと夕咲を乗せたエレベータは僅か数秒前に地上を離れたというのに、地球はもうこんなにも遠い。

あと十秒もしないうちにわたしたちの躰は大気圏を越える。

太陽が真上から差している。光がまっすぐわたしたちを射抜いて落ちた。

この場所から放射状に影が伸びているのが見える。

地平のかなた、国境の先まで平等につづく光。影がそれを表している。

足元には天空の宇宙ステーションの影がおぼろげに落ちていた。

濃い光とおぼろの影、そして濃い影のトリコロール。

幾千幾万の屍を照らす。

音のない午後。

乾いた空気をはらんで透明なチューブの中をふたつの躰を乗せて昇る。

この大地にはどれだけの血が流れたのだろう。或いは、わたしの血はどこへ。

夕咲の頬は冷たい。もう如何したって動かないその躰はただの鋼鉄の人形と変わらない。

主の不在を知らず、細胞は生きている。

眠るように閉じられた瞳を見つめた。瞼が、わたしと夕咲の間を閉ざしている。

触れた頬はまだ生き生きとして、今にも目を覚ましそうなのに。

横たわる夕咲の頭を抱えるようにしてしがみついた。

わたしに涙など既になく。

永遠など、いらぬ。

もう誰もわたしを護ることなどできない。

この先の未来は、この地上になどもう降り注がないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7634v/>

昇る～ 宇宙エレベータの夢の話

2011年10月3日08時34分発行